付論 日置の古地理環境

石田泰弘・鬼頭 剛・蔭山誠一

1. はじめに

日置本郷B遺跡のある愛知県愛西市日置町は、 近世以前の尾張国の南西縁辺部にあたり、かつて は海水域がひろがっていた地域と考えられてい る。その為、この地域における考古学的資料の蓄 積は進んでいなかったが、『佐屋町史』において 服部元之氏が地表面の考古遺物の表面採集などに よる地道な成果により、人間の営みが古墳時代初 頭になって始まることを明らかにされた(註1)。 服部氏は佐屋地域における遺跡分布の時期的変遷 を通じて、遺跡の展開を3段階に分けて論じてお り、日置本郷B遺跡のある現在の愛西市日置地 域を第1地域として弥生時代後期にさかのぼって 開発された地域であることを指摘した。その後湯 浅健二氏・赤塚次郎氏・江崎武氏らによるあま市 に所在する蜂須賀遺跡の出土遺物の分析を通じ た「海部の古道」の指摘があり(註2)、赤塚次郎 氏・石黒立人氏・宮腰健司氏・城ヶ谷和弘氏・池 本正明氏による津島市寺野遺跡などの出土遺物の 分析を通じた遺跡の評価と津島地域の考古学的画 期を4段階に分けて論じられている(註3)。この ような遺跡の時期的消長の存在と遺跡の時期的変 遷がみられることは、愛知県の海部津島地域にお いて多様な歴史的展開が存在したことを示唆して おり、興味深い研究成果である。本論では、この ような遺跡における歴史展開がおこる背景につい て、明治17年作成の地籍図を利用した解析と現 在の表層地形に刻まれた起伏の分析、そして考古 学的資料による遺跡の分析と当地域に残る文献資 料の分析を総合して明らかにしていきたい。

なお、本論における地名の表記は、近年の市町村合併に伴い変更された地名ではなく、西暦2000年(平成12年)時点の市町村名を使用し、明治17年作成の地籍図の解析に関する部分において、地籍図中に記載された旧村名を地域名として表記する。

2. 旧日置村周辺の地籍図の解析

(1) 方法

ここでは明治 17 年作成の地籍図について現在 の愛西市日置町を中心とする地区で、愛知県公文 書館所蔵の向島村、津島村(甲・乙・丙がある)、 見越村、根高村、古川村、中地村、柚木村、内佐 屋村、佐屋村、須依村、日置村、稲葉村、北一色村、 甘村井村、落合村、唐臼村、中一色村、犬井村の 地籍図を図化し、解析を行った(図53)。地籍図 の解析方法は、地籍図に残る地目により寺院・神 社、宅地、畑地・林・薮、水田、草生などに分類 して図化した。そして宅地や寺院や社寺、畑地が 相対的に標高の高いところに、水田などが低いと ころで営まれるという我々の経験的な認識に基づ いて、地籍図の地目が神社・寺院および宅地・畑 地・林・薮の部分を微高地群とし、水田と草生な どの部分を低地部として分け、その特徴と微高地 群どうしの前後関係について述べる。

(2) 地籍図に見られる微高地群と低地部の抽出 微高地群について図 53 の北西側から述べていく。

向島村の佐屋川東岸の堤防に伴う佐屋川東堤微高地群、向島村の北部中央から南西にのびる向島西微高地群、向島村東縁部を南北にのびる向島東微高地群、津島村の天王川の東岸の部分で字愛宕の北西端部にいたる藤波微高地群、中地村の西側で天王川から南南東にやや弧状に広がる中地西微高地群、大慶寺池から中地村東側を南東にのびる中地東微高地群、津島村字愛宕を西北西から東南東にのびる愛宕微高地群、新堀川の東岸を根高村から見越村にのびる根高見越微高地群、津島村字高畑と字寺前付近から南に津島村字柳原東部にいたる寺前柳原微高地群、津島村字埋田から南に津島村字愛宕の東部にいたる埋田愛宕微高地群、根高村の南側から津島村字立込の東側を通り津島村

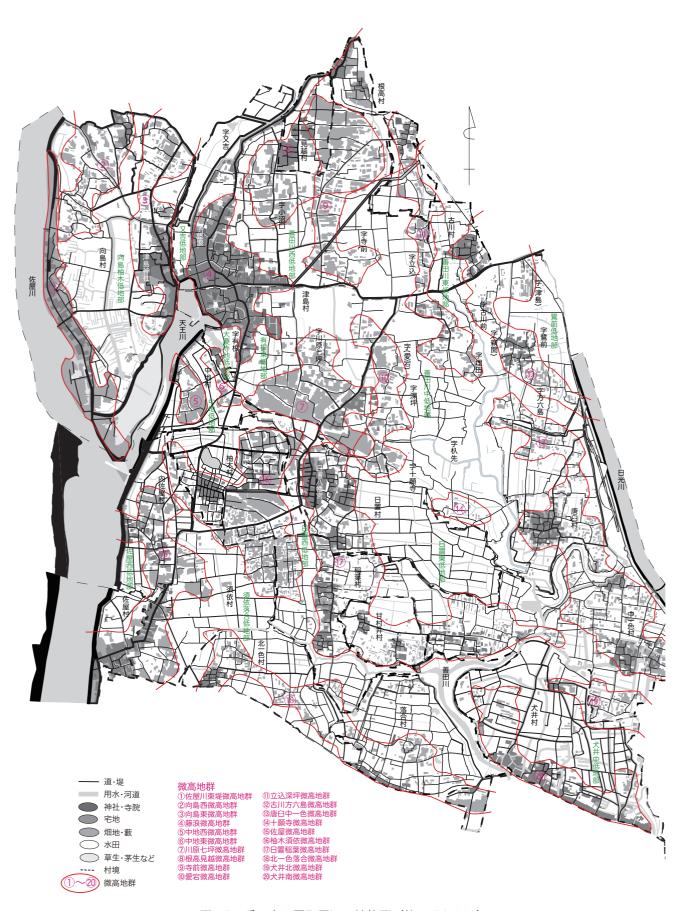


図53 愛西市日置町周辺の地籍図(約1/30,000)

字深坪へ南北にのびる立込深坪微高地群、古川村 から南東の津島村字新開にいたる古川新開微高地 群、津島村字南新開から南東に広がり唐臼村の中 央部を通り南東にある中一色村にのびる唐臼中一 色微高地群、津島村字元寺にある西北西から東南 東に畑地が散在する元寺微高地群、内佐屋村から 須依村の西端部を通り佐屋村に弧状に展開する佐 屋微高地群、柚木村南東部から須依村北東部と日 置村西部を経て稲葉村北西端部にいたる柚木須依 微高地群、日置村中央部から稲葉村中央部と甘村 井村を経て稲葉村南東部にいたる日置稲葉微高地 群、北一色村西部から落合村南東部にいたる北一 色落合微高地群、犬井村北東部から中一色村南端 部にひろがる犬井北微高地群、犬井村の南縁部を 善田川の北岸に沿ってひろがる犬井南微高地群が ある。

同様に低地部を述べていくと、向島西微高地群・ 佐屋川東堤微高地群と向島東微高地群に挟まれた 向島柚木低地部、向島東低地部と根高見越微高地 群・藤浪微高地群に挟まれた南側は天王川につな がる又吉低地部、中地西微高地群と中地東微高地 群に挟まれて南側を柚木須依微高地群まで含む中 地低地部、中地東微高地群と藤波微高地群の南端 部に挟まれた車河戸大慶寺池低地部、藤波微高地 群の南端部と愛宕微高地群に挟まれた愛宕西低地 部、北側を藤浪微高地群と根高見越微高地群・寺 前柳原微高地群に南側を愛宕微高地群と埋田愛宕 微高地群に挟まれた善光寺川西低地部、北側を寺 前柳原微高地群・埋田愛宕微高地群と立込深坪微 高地群に南側を元寺微高地群・唐臼中一色微高地 群に挟まれた善光寺川中低地部、立込深坪微高地 群・唐臼中一色微高地群と古川新開微高地群に挟 まれた善田川東低地部、古川新開微高地群の東に ある新開低地部、佐屋微高地群の西にある佐屋西 低地部、北西側を佐屋微高地群と柚木須依微高地 群の南側部に南西側を北一色・落合微高地群と日 置稲葉微高地群の南側に挟まれて善田川にいたる 須依落合低地部、柚木須依微高地群と愛宕微高地 群・日置稲葉微高地群の北側に挟まれた日置西低 地部、北西側を日置稲葉微高地群と埋田愛宕微高 地群に南西側を日置稲葉微高地群・犬井北微高地 群と元寺微高地群・唐臼中一色微高地群の南側に 挟まれた日置東低地部、犬井北微高地群と犬井南 微高地群に挟まれた犬井中低地部がある。

(2) 微高地群の特徴

これらの微高地群は津島村の北端部から向島村の北端部では北東から南西にのびる傾向がみられるが、全体では北西から南東にむかって帯状にのびる傾向が顕著である。この中で近接・隣接している微高地群においては本来は一つであった可能性があり、例を挙げれば向島東微高地群の北側と向島西微高地群が北東から南西にのびる可能性があることや寺前柳原微高地群と埋田愛宕微高地群、立込深坪微高地群と唐臼中一色微高地群はその位置関係からは南北につながっていたそれぞれ一つの微高地群であった可能性が高い。これらが地籍図において分断されているのは、その後に新しい河川が流れたり、用水が掘削されて水田が広がった為に低地部に変わったなどの理由が考えられる。

反対に大きな微高地群を形成しているものは、 複数の微高地群が重複して大きな微高地群にみえ るものもある。例えば根高見越微高地群は立込深 坪微高地群が根高村の南側から、寺前柳原微高地 群が津島村字寺前西側付近から分かれて南下する する点や、同様に津島村字愛宕の南西部で愛宕微 高地群と埋田愛宕微高地群と日置稲葉微高地群が 重なっており、本来は別々に形成されたものが一 つの微高地群になったと考えられるものもある。

また一定の基準に基づくと別々にみえる微高地群ではあるが、根高見越微高地群と藤浪微高地群、向島東微高地群の南側、愛宕微高地群、柚木須依微高地群、日置稲葉微高地群はより大きな視点をもつと一つの大きな微高地群とも捉えることができる。

(3) 地形の新旧関係

以上の分析から、地形の新旧関係を分析する。 明治17年作成の地籍図に描かれている主な河川 は西から佐屋川と天王川、善田川があり、地籍図 の上流で佐屋川は領内川と、天王川は領内川と日 光川、三宅川と善田川は三宅川から分岐する河川 であり、地籍図に描かれた佐屋川と天王川は、愛

知県所蔵の元禄期に描かれたと考えられている『尾張国絵図』にみるように、江戸時代前期にさかのぼる可能性が高く、日光川も後述する図 56 にみるように 18 世紀中頃の掘削である。よって佐屋川に直接関係する佐屋川東堤微高地群と天王川に関係する向島東微高地群と根高見越微高地群・藤浪微高地群に挟まれた又吉低地部、日光川に関連する古川新開微高地群と新開低地部を除くとその他の地形は江戸時代前期より古い地形といえる。

次に江戸時代前期に流れていた天王川とその旧 河道である又吉低地部に直接つながる低地部は藤 浪微高地群の北東より続く善田川西低地部とそれ に続く愛宕西低地部、藤浪微高地群の南より車河 戸大慶寺池低地部、中地低地部、須依落合低地部、 中地低地部より続く日置西低地部がある。須依落 合低地部は北西側で佐屋微高地群と柚木須依微高 地群が接している部分があるので、中地低地部よ り古い可能性があるが、これらは江戸時代前期以 前の天王川の旧河道と関連するもので、中世にさ かのぼる可能性がある。同様に佐屋川に直接つな がる佐屋微高地群とその西にある佐屋西低地部も 江戸時代前期以前に佐屋川と関連する旧河道であ る可能性が高い。また向島柚木低地部は近世以後 の堤である佐屋川東微高地群を挟んで北西側で佐 屋川に続いており、南東側で天王川の堤防を挟ん で続いている。よって、これらの地形に関連する 微高地群に閉ざされているその他の低地部とその 低地部を挟む微高地群は、中世以前に形成された 地形と考えられ、地籍図の東側では、善田川と関 連する流路がこれらの微高地群を切って流れてい る箇所が多く見られる。 (蔭山)

3. 愛西市日置周辺の表層地形解析

(1) 分析方法

愛西市日置地域がどのような場所に立地するのか、また、日置周辺の河川の変遷を調べるため、津島市から愛西市にかけて現在の表層地形解析のために等高線図を作成した。等高線図の作成には「愛西市都市計画基本図 (1/2,500)」の平成 17 年

(2005年) 修正版にプロットされた標高値を用いて鬼頭が作成した(図 54)。

(2) 表層地形の解析結果

東西 4.3 km、南北 3.9 km の範囲において、 等高線間隔 0.2m (一部で 1.0 m) で標高 -2.6 m から標高 6.0 m までの等高線が描ける。解析範 囲の現在の状況は西に海部幹線水路が南流し、東 には善太川が北から南へ向かいほぼ一直線に流れ る。海部幹線水路に並行してその東側に国道 155 線が通っている。図の中央には名古屋鉄道尾西線 が通り、北側で尾西線と津島線とに分岐する。

解析範囲全体では北西側において標高 0m 以上 で相対的に標高が高く、南東側に向かうにしたが って次第に低くなる。解析範囲は典型的なゼロメ ートル地帯であるため、標高の低いところでは標 高値がマイナスとなることに注意が必要である。 標高がもっとも高いのは津島市下新田町で標高 6.0 mを超すところが見られ、本地点も含めて北 の津島市河田町から下新田町、大縄町、宮川町ま で、現在の津島高等学校の所在する範囲には標高 0~6 m までの延長約 2.8 km におよぶ尾根状に 高い部分が認められる。いっぽう、標高のもっ とも低いのは愛西市庄屋敷から大正にかけて標高 -2.6 m が認められる。本地点も含めて、北の津 島市杁前町から元寺町、愛西市日置町、愛西市金 棒町、落合町にかけて標高-2.0 mよりも低い地 域が広がる。

本論ではかつての河川流路跡の解析を目的とするため、主に等高線図にあらわれる谷状の地形に注目する。範囲の西側から順に述べる。海部幹線水路の東側には水路に並行して津島市大縄町から愛西市四会町を通り開田、津島市東野方町、愛西市森川町に至る南北方向の谷地形がみられる。北の津島市河田町から江西町、江東町、老松町を通り宮川町までに標高-0.8~0 mの東西の最大幅約0.6 m、南北約2.4 kmの谷状地形がある。この谷地形には天王側公園の丸池を含む津島市宮川町から老松町までの谷地形が南側で合流している。解析範囲北の津島市又吉町から城山町までには標高-1.0~0 m までの池状の凹地がみられる。解析範囲の東、津島市埋田町から古川町にか

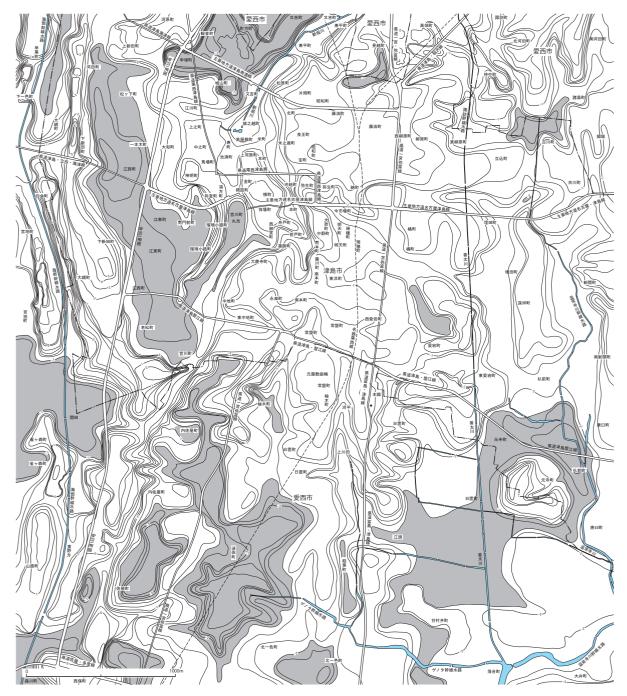


図 54 愛西市日置町周辺の等高線図

けては東西方向に約8.8 kmの距離をもって低地がみられ、そこを谷頭として南方向へ津島市深坪町、杁前町に至る標高-2.6~-1.2 mで距離約2.0 kmの谷地形が認められる。この谷地形には、津島市弥生町から今市場町、橘町を通り深坪町に至る標高-1.8~-0.4 mの北西-南東方向の谷地形と、東端の津島市郷城から新開町を通り、杁前町に至る標高-2.4~-1.0 mの南北方向の谷地形

が深坪町・杁前町で合流する。また、それまでの谷地形が南北方向を向いているのに対して、津島市中地町から南本町、愛宕町までの標高 -2.6~-0.8 mで西から東へ開口した谷地形がある。この谷の南には津島市常盤町から愛西市柚木町、須依町に標高 -2.6~-0.8 mの南北方向の谷がみられる。この谷には愛西市内佐屋町から柚木町にかけて標高 -1.4~-1.2 mの西から東へ向けて開

口している谷地形が須依町で合流する。津島市常盤町から須依町にかけてみられた谷地形の、尾根状地形を挟んでさらに東側には愛西市柚木町元屋敷曲輪を谷頭として、愛西市日置町河平、日置町上川田、稲葉町、北一色町にいたる標高-2.4~-0.8 mの南北方向にのびる距離約2.3 kmの谷地形が認められる。この谷地形は、津島市常盤町から愛西市日置町本郷、稲葉町江頭まで、南北の距離約1.3 kmで南側で閉じた舌状の尾根地形の西縁を通り、この尾根地形の東端に調査地がある。(3)地形解析結果からわかること

表層地形解析の結果から推定できる地形の特徴 を挙げる。解析範囲の地形は標高 0m 付近の等高 線を境として、それよりも西ないし北西側に認め られる地形と、東側でみられる地形とに大きく分 けられそうである。西ないし北西側では等高線間 隔が非常に密であり、標高の高いところと低いと ころとの差が大きい。地形にこのように明瞭な差 異を生じさせるためには、流路の位置が固定され てあまり移動をせず、もともとの地形を破壊する ことなく堆積物を上方へ累積させる必要がある。 だが、本論の解析範囲は沖積低地の三角州域にあ たり、上流から運搬されてきた堆積物を溜める場 所にあたっている。濃尾平野の三角州域は洪水多 発地帯としても知られており、河川流路が長年に 渡って自然の状態で固定されたままでいることは 難しく、人工的に河川流路を固定された可能性が ある。例えば、海部幹線水路に並行して東側に認 められる谷地形や、天王川公園の丸池を含む津島 市宮川町から老松町までの谷地形などは、流路の 両脇を標高値の高い尾根状の地形で挟まれてお り、人工的に流路を固定されているものと思われ る。

いっぽうで、解析範囲の東側では標高 0m より も低い等高線からなり、等高線間隔は広く、相対 的な標高差も小さい。推定される谷地形の方向も 南北方向を向くもの、北西 - 南東方向を向くもの、 西から東へ開口しているものなど、方向に一定の 傾向がみられない。これは、かつて東側を流下し ていた河川流路が頻繁に移動をしたためと考えら れ、等高線間隔が広いことや相対的な標高差が西 側に比べて小さいことも、流路が固定されず、上 流から運ばれてきた堆積物が周辺に分散された結 果であると考えられる。また、西側でみられる谷 地形がほぼ南北方向を向き、さらに北側へ連続す るようにみられることと比べて、東側でみられる 谷地形は谷頭が解析範囲の途中から現われて、そ れよりも北には連続しないものがみられる。例え ば、津島市埋田町から古川町にかけてを谷頭とし て津島市深坪町や杁前町に至る谷地形がそれにあ たる。現在の海部幹線水路や善太川が解析範囲の さらに北から流下してきていることを考慮する と、途中から谷頭がはじまっている谷地形は、現 在の河川流路とは異なるかつての流路跡であると 考えることができる。愛西市日置本郷地域にも津 島市元屋敷曲輪を谷頭として愛西市河平、稲葉町、 北一色町に至る谷地形が認められることから、途 中から谷頭が現われて北側には連続しない特徴を もち、調査地は堆積システムの古い地形の上に立 地する。解析範囲の西ないし北西側と東側とで、 等高線の特徴から推定される地形的な特徴の差異 は、地形を生じさせた堆積システムの新旧の差を 現わしているのかも知れない。この推論の証明に は堆積層序や堆積年代の確認、地形表層からの考 古遺物の採取などが必要であり、今後の課題とな ろう。

以上をまとめると、つぎのことがわかる。

- 1. 標高-2.6~6.0 mまでの解析範囲全体では西ないし北西側で地形が高く、南東へ向かい次第に低くなっている。
- 2. 解析範囲に現われる等高線の特徴や谷地形の 方向から、標高 0m を境として西ないし北西側の 地形と東側の地形とに大きく 2 分される。
- 3. 西ないし北西側の地形は、南北方向の谷地形が標高差の大きい尾根状の地形に挟まれており人工的な影響が大きいように思われる。対して東側の谷地形は標高差も小さく方向に傾向がみられないことから、自然の状態がより残っていそうである
- 4. 上記の地形的な特徴は堆積システムの新旧の 差を現わしている可能性があり、調査地点は古い 堆積地形の上に立地している。 (鬼頭)

4. 分類・抽出した地形の評価

それでは、地籍図において抽出した地形分類と表層地形の解析から認められた地形はいかなる関係をもつのであろうか。ここでは、その対応関係と抽出された地形と遺跡の位置関係を分析し、その特徴を述べたい。

(1) 微高地群の区分と表層地形との対応関係(図55)

地籍図をもとに集落とまわりの畑地、さらにそのまわりに広がる水田の分布パターンをもとに20の微高地群と、相対的に低い14の低地部が区分された。表層地形解析では西ないし北西側で標高が高く、標高差の大きい尾根状の地形が特徴的であることと、南東側に向かい次第に低くなり、標高差が小さい東側の地形とに2分された。ところで、微高地群の設定は地籍図の土地利用の状況をもとに描かれるが、微高地群と低地部とを認識し区分する作業には主観が入る可能性がある。ここでは、設定された微高地群および低地部を表層地形解析の結果と比較して、その妥当性を検討する。なお、微高地群を設定した地籍図範囲と表層地形解析を行なった範囲とは完全には一致しておらず、地籍図の範囲の方が若干広い。

地籍図をもとに微高地群は20に区分され、表層地形解析の結果においてもそれぞれの微高地群に対応した、まわりよりも相対的に高いところがみられる。さらに詳しく検討してみると、例えば遺跡の立地する日置稲葉微高地群(微高地群17)は北の日置八幡宮から稲葉村を通り、甘村井村までが一連の微高地群と設定されているが、表層地形解析では愛西市江頭において東西方向の谷地形が微高地との間を貫いており、江頭よりも南側の甘村井に続く微高地とはまた別のものと読み取ることができる。だが、おおよその微高地群のパターンは、表層地形解析の相対的に標高の高い地形と対応する。なお、犬井北微高地群(微高地群19)は表層地形解析の範囲外にある。

次に地籍図の低地部と現在の谷状地形との対応 をみてみる。向島柚木低地部は津島市河田町から 江西町、老松町、宮川町に見られる谷状地形に、 又吉低地部は現在の天王川公園の丸池と津島市又 吉町から城山町の谷地形に対応をしている。善田 川西低地部および善田川中低地部は津島市弥生町 から今市場町、深坪町に至る谷地形に対応し、善 田川東低地部は津島市郷城から杁前町に至る谷地 形に対応をしている。設定された低地部と表層地 形解析に現われる谷地形とは、微高地群と同じよ うにおおよそ対応するようである。このように、 地籍図に設定された微高地群と低地部の分布パタ ーンは、表層地形解析から読み取れる現在の地形 の起伏と比較的良好に対応をしており、地籍図を もとにした微高地群と低地部の区分には妥当性が みられる。

さて、大局的にみれば良い対応関係を見たが、 ひとつひとつをさらに詳しく見ると、地籍図の微 高地群・低地部パターンには現われない表層地形 の起伏が存在することも指摘しておかねばならな い。例えば、遺跡の立地する愛西市日置町周辺に は日置八幡宮から稲葉村、甘村井村までの日置稲 葉微高地群(微高地群 17)と、その西側には日 置西低地部、東には日置東低地部が設定されてい る。表層地形解析ではこの日置西低地部のさらに 西側には、南北方向にのびる尾根地形を挟んで津 島市常盤町から愛西市柚木町、愛西市須依町にか けて谷地形が認められ、地籍図では柚木須依微高 地群(微高地群16)と一括されている範囲内に も微小な谷地形が認められるのである。また、日 置稲葉微高地群(微高地群17)の東縁境界線には、 地籍図には現われないさらに微小な複数の谷地形 が東方向に開口して認められ、地形変化には時代 の異なる堆積システムが関わっていそうである。 このような水平距離にして 1km に満たない規模 の地形の成り立ちを考えるときにこそ、考古遺跡 の発掘調査で得られた情報が必要になってくるの である。 (鬼頭)

(2) 推定される地形と遺跡との位置関係

それでは、地籍図において認められた微高地群の形成時期はいつ頃であろうか。現在の表層地形にみられる、等高線の特徴や谷地形の方向から、標高0mを境として人為的影響の大きいと思わ

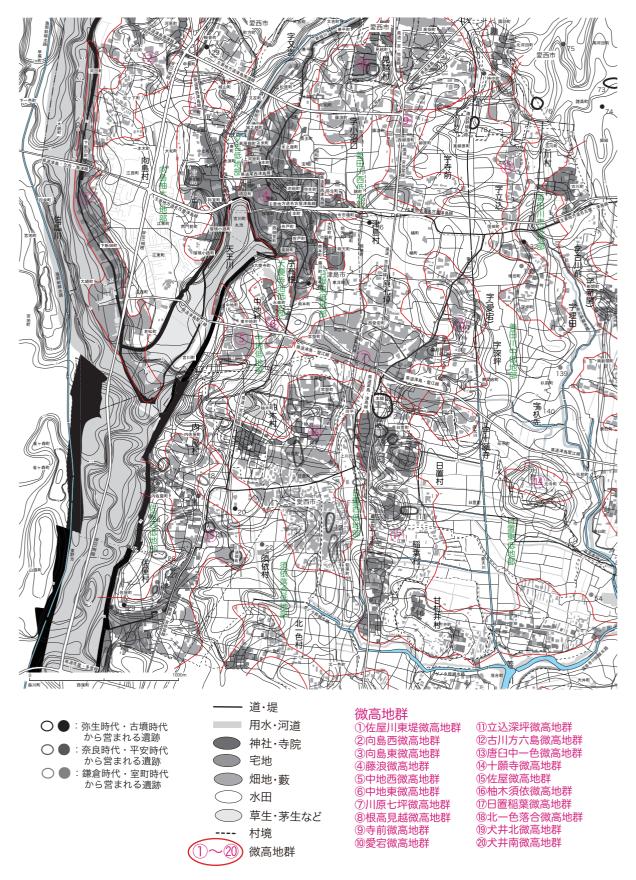


図 55 地籍図と等高線図の対応関係(遺跡番号は本書第1章表1に対応する)

れる西ないし北西側の地形と自然の状態がより残っていると思われる東側の地形とに二分され、その分布範囲は、先に見た地籍図から分析した微高 地群と低地部からなる地形の新旧関係と大まかに 対応している。

次に表層地形図に遺跡の分布と微高地群の分布 を重ねると、古墳時代以前の遺跡は西から③向島 東微高地群の上に観音町 A 遺跡(遺跡番号 129、 古墳時代)、④藤浪微高地群の上に南本町遺跡(遺 跡番号134、弥生時代~江戸時代)、⑪立込深坪 微高地群の上に埋田遺跡(遺跡番号132、弥生時 代~鎌倉時代)、⑤佐屋微高地群の東にある須依 落合低地部の中に砂山 A 遺跡 (遺跡番号 20、弥 生時代~中世)、⑪立込深坪微高地群の南西にあ る善太川中低地部の中に八町遺跡(遺跡番号78、 古墳~鎌倉時代)、藤浪微高地群の東にある善太 川西低地部の中に橘町遺跡(遺跡番号136、古墳 時代中期)、①日置稲葉微高地群の上に日置八幡 宮遺跡(遺跡番号2、弥生時代・古代~近世)が みられる。これらをみると、地籍図において検討 した地形の新旧関係には関係なく、抽出した微高 地群の形成時期は全て弥生時代から古墳時代以前 にさかのぼる可能性が高いことが確認できる。し たがって先に述べた地形の新旧関係は、新しい時 代の瀬替えや築堤などといった人為活動の影響 の強さの違いを反映しているようである。この点 については、表層地形において指摘した標高0m を境にみられた地形の差異、例えば標高差の大き い尾根状の地形に挟まれた南北方向の谷地形で人 工的な影響が大きいように思われる西ないし北西 側の地形に比べて谷地形の標高差が小さく、谷の 長軸方向に傾向がみられないことから自然の状態 がより残っていそうである東側の地形、という理 解にもかなうものと思われる。そして地籍図の低 地部にある遺跡は、詳細にみると明治 17年の土 地利用において微高地群には含まれないものの、 表層地形の解析においてみられる谷地形の中央に 位置するのではなく、微高地の尾根の縁辺と考え られる位置に立地しており、古い時代の遺跡がみ られる地点が明治17年の地籍図より、地形の起 伏に忠実に対応して分布する傾向がみられるよう である。 (蔭山)

5. 文献資料からみた旧河道と日置

(1) 文献からみた古代の海部地域

日置という地域がいつ頃からあったかについては詳らかではない。

海部郡自体が往昔どうであったかも詳らかではない。

ただ、飛鳥京跡苑池遺構から出土した木簡に「戊寅年十二月尾張海評津嶋五十戸 韓人部田根春赤米斗加支各田部金」という文言が確認され、天武天皇7年(678)時「海評」すなわち海部郡が存在していたことは明確である。

正倉院文書にも「尾張国海部郡津積郷」、「尾張国海部郡志摩郷」といった記述が確認でき、いくつかの郷が存在していたことがわかる。10世紀に成立したといわれる「和名抄」によれば、海部郡内に

新屋・中島・津積・志摩・伊福・嶋田・海部・ 日置・三方・物忌・三宅・八田

12 の郷があったことがわかる。ここに日置郷の 名が確認でき、恐らくこの記事が日置の初見であ ろう。

927年の「延喜式神名帳」をみると、海部郡内に 八社名を確認できる。

漆部神社、諸鍬神社、国玉神社、藤嶋神社、宇太志神社、由乃伎神社、伊久波神社、憶感神社 由乃伎神社ー諸鍬神社ー憶感神社ー藤嶋神社といったラインは、佐屋路に沿って存在しており、水野時二のいうように、この佐屋路が条里との関わりを有する(註4)とすればこの神社の分布は興味深い。また諸鍬神社の所在する諸桑の満成寺裏から1838年いわゆる「諸桑の古船」が出土している。この古船は20m余という大きな船で準構造船ともいわれている。満成寺もこの地の白砂青松に魅せられ寺を建立したともいわれている。諸桑の地が古代の海岸線沿いの集落であった可能性が高いのではなかろうか。

「延喜式兵部省」をみると、古代東海道で伊勢 の榎撫から馬津、新溝といった駅が存在したこと

がわかる。馬津駅の比定地は近世以来様々な説があるが、有力とされる説に、現在の愛西市町方町の松川説と津島という説がある。「尾張国郡司百姓等解」に「就中馬津渡、海道第一之難處、官使上下之留連處也」という記事がみえ、さらにその近辺には、「海路」、「白浪忽起、任身於鯨鯢之脣」といった記述も散見しうることから、馬津辺りは海に近い地であったと思われる。

これらのことを考えると、古代の海岸線を比定するについては、(馬津) -柚木-日置-諸桑-神守-秋竹という文献上確認できるラインを視野にいれて検討すべきであろう。

(2) 海東郡・海西郡の郡界と河川の変遷

『佐織町史通史編』によれば、11世紀頃に海部郡が海東・海西郡に分かれたのではないかと推測されている。

1283(弘安6)年に制作された滋賀県松尾寺蔵鰐口に「海西郡三腰」という銘が確認できる。

三腰は当時海西郡であったことがうかがえる。 (応永5)年の寶生院所蔵の「病者加持秘事」の 奥書には、「尾州海西郡門真庄天王宮」とある。 津島も海西郡となる。(応永6)年の寶生院所蔵「寶 朱水」の奥書にも「尾州海西郡門真庄三腰極楽寺」 という記述が確認され、この時点もなお三腰は海 西郡であった。

1403 (応永 10) 年銘のある津島神社鐘には「海西郡津嶋」とあることからこの時期まだ津島は海西郡であった。

1418 (応永 25) 年の「尾張国守護斯波義淳遵 行状」をみると、「海西郡内西野高村」とある。 同時期に発給された「足利義持書状」をみると「尾 張国日置庄内西野高村」とあり、西野高村は日置 庄内に位置し、海西郡であったことがわかる。西 野高村がどこにあったかは未詳であるが、日置庄 内ということで日置近辺とすれば、日置あたりは 海西郡であったと想定しうる。

『張州雑志』所収の1324(正中2)年「某下文写」をみると、「海東 一百丁内 衣縫」とあり、百町、 大井が海東郡であったことがわかるし、1447(文 安4)年の「万徳寺釈論」の奥書をみると、「海 東郡佐折」とあり、佐折も海東郡であったことが わかる。

『尾張志』所収の1450(宝徳2)年「万徳寺釈論」 の奥書には、「海東郡富吉庄大野」とあり、大野 も海東郡であった。

これらの記述等から、当時の郡界は見越・日置の東側で、大野・大井の西側にあったことが指摘しえよう。旧善太川が、諏訪(現在の愛西市諏訪町)あたりから南下して流れていたといわれており、恐らく旧善太川の河道が郡界であったと考えるのが妥当ではないか。

ただ、1499 (明応8) 年の熊野那智大社「旦那売券」をみると、「かひたふの郡みこしのこくう蔵坊」とあり、見越が海東郡に編入されていることがわかる。

この間に大きな河道の変動がみられたのではなかろうか。1498(明応7)年8月には明応の地震が起こっており大きな被害があったといわれていることからすれば、この地震の影響も想起しえよう。

『海道記』の 1223 (貞応 2) 年 4 月 7 日条を みると、

市腋を立ちて、津島の渡という所を舟にて下れば、蘆の若葉あをみわたはりて、つながぬ駒もたちはなれず、菱の浮葉に浪はかれども、難面かはづはさわぐけもなし、とりこすさをの雫袖にか、りたれば、さしてものを思ふとなしに水馴れ浪に袖は濡しつ渡りはつれば尾張国にうつりぬ、片岡には、朝陽の影うちにさして、焼野の草に雉なきあがり、小篠ヶ原に駒あれて、泥みしけしき引きかへて見ゆ、又園中に桑の下宅あり、宅には蓬頭なる女、簀にむかひて蠶養をいとなみ、園には僚倒たる翁、鋤を持ちて農業をつとむ(以下略)

とある。市腋から津島の渡を経て尾張国へ入る様子が描かれている。この『海道記』の記述にしたがえば、市腋は伊勢に属し、津島と市腋の間に国境そして大河が存在していたことになる。

この『海道記』の段階においては、津島と思われる地は牧歌的な風景が描かれており、当時はまだ町場化していなかったことがわかる。

『宗長手記』の1526(大永6)年条をみると、 此所のおのおの堤を家路とす、橋あり三町 あまり、熱(勢)田の長橋よりは猶遠かる べし、およひ州俣河落合、近江の海ともい ふべし

とあり、堤を中心に、家が立ち並び、町場化していることがうかがえる。大きな橋があり、「およひ」と「州俣」の両河川が津島辺で合流していたという。川名等を精確に把握していたかどうかは詳らかではないが、大河川が津島近辺で合流していたということは当時の地理的景観を考える上で重要であるう

豊臣秀吉や尾張藩によって、木曽川の流路の変わり、築堤等によって河川の安定化が図られた。

天正の洪水によって木曽川の流路が変わり、その後世に言う尾張側が三尺高いといわれている「御囲堤」が築かれ、尾張藩の治水に有効であったということは、事実であったかどうかは別にして夙に知られている。

しかし、今日でいうところの木曽三川下流域においては、低地ゆえ已然水害を被ることが多く、御手伝普請等による治水工事が実施された。中でも広く知られているのが宝暦期に薩摩藩によって実施された普請工事である。尾張藩においても、天明期に時の藩主宗睦によりいわゆる天明の河川改修が実施された。このとき新川の掘削とともに、日光川が改修され、その時津島川も築留られ、勝幡近辺で日光川・領内川・三宅川が合流する今日のような流路はこの改修によってなされた(図56)。

そして明治に入り、ヨハネス・デ・レーケによる木曽三川改修に伴い、佐屋川廃川等により、今日の河川の様相が安定化した。

(3) 日置

日置の初見は、先述のように「和名抄」掲載の 海部郡内の郷名に「日置」の名が確認できること であろう。

「臺記」1150(久安6)年7月8日条に「日置 庄」の名がみえる。

『佐屋町史通史』によれば、この庄園の初期の 歴史は詳らかではないが、藤原氏の所領となり、 保元の乱によって没収された。その後皇太后宮領 となり、1187 (文治3) 年 10 月左女牛若宮に寄 進された。

恐らく今日でいうところの日置八幡宮は、左女 牛若宮の関係で創建されたものと思われる。「尾 張志」によれば源頼朝が勧請したと伝える。

当宮には、1252 (建長4) 年銘をもつ木造獅 子頭と1493 (明応2)年銘をもつ懸仏が伝来する。

頼朝が勧請したかどうかは別としても、ほぼ同 時期に当宮が成立していたものと推測しえるので はなかろうか。

1425 (応永 32) 年の「満済准后日記」の記述をみると、この年大洪水があってかなりの水損があったという。

1318(文保2)年12月23日付「関東御教書案」をみると、日置庄が富吉庄と境争論を行っていることから庄域は詳らかではないが、東は富吉庄と接してしたことがわかる。

戦国期に入り、1533(天文2)年2月14日付の鱸信次田地売券に「日置」の名がみえ、この地域に土地を保有していたことが確認できる。同年7月24日には勝幡を訪れ滞在した京の山科言継一行らは、日置八幡を訪れ、鱸右近から湯漬を振舞われ、その後津島天王を見物し、勝幡へ戻っている(「言継卿記」)。

同一人物か同じ一党なのかは不明であるが、鱸氏 がこの地においてある程度力を有していたことが わかる。

『尾張徇行記』によれば、堀田相模守家の先祖 は日置村出身で日置八幡宮を氏神としたとある。 堀田相模守家といえば、幕末に老中正睦を輩出し た佐倉堀田氏をさす。

日置八幡宮は日置庄期も六条八幡宮の要職を勤めていることからすれば、日置の地は八幡宮を中心に集落を形成していたと考えられよう。(石田)

6. 日置の古地理環境

(1) 日置本郷 B 遺跡で見つかった自然流路(図51・図55)

地籍図を用いた検討により日置本郷B遺跡調

査地点は日置稲葉微高地群(微高地群 17)に分類され、表層地形解析との対応も調和的であった。また表層地形解析より、微高地の東縁には東に開口したさらに微小な谷地形が認められることを指摘した。ここでは、微小な谷地形と遺跡の調査結果との対応関係から、調査地点周辺の古地理環境について述べる。

表層地形解析の結果を基に遺跡の周辺のみに注目すると、遺跡の北側には津島市常盤町から愛西市日置町本郷にかけて北西 - 南東方向に標高-1.2~-0.6m までの東へ開口した谷地形が認められる。対して遺跡の南には、県道一宮弥富線が日置町において屈曲する地点の東に標高-1.4~-0.8m の谷地形がみられる。

いっぽう、遺跡の調査結果において、調査区の北では中世後半期の考古遺物を含む河道跡(002NR)と近世の河道跡(001NR)が北傾斜の層理面をもって堆積していた。南では暗灰黄色のシルト層からなる河道跡(096NR)を覆って古代~奈良時代の考古遺物を含む地層と、中世後半期のものを含む地層とに標高-2.50mをおおよその境として2分された。このように、表層地形解析の結果から北と南にみられるそれぞれの谷地形に対応するように、発掘調査でも北と南に分かれて河道跡が検出された。地形のもつ特徴と実際の発掘調査結果とはよく対応しており、遺跡でみられた河道跡は谷地形の一部を見ているようである。

ところで、考古遺跡の下位層でみられる地層は全体に堆積構造の見られない塊状で均質な砂質シルト層から構成された。ここで注目されるのはこの砂質シルト層の一部が黒褐色(2.5Y3/2)を呈することである。堆積物が黒みを帯びる原因として、植物や動物などの生物体に由来する遺体や炭化物の濃集が考えられ、色調では同じ黒色や黒褐色に分類される堆積物もそれらの濃集の度合いにより黒みの強さはさまざまに変化する。また、水が絶えず流れるような場所では生物遺体や炭化物は溜まりにくく、流水環境と生物遺体や炭化物の濃集とは負の相関にあると言える。

調査区でみられた黒褐色を呈する砂質シルト層

は記載上では黒褐色(2.5Y3/2)に分けられるものの黒みの度合いは小さく、生物遺体や炭化物の含有量は少ない。黒みの色調の濃淡は堆積期間の休止期を現わしており、休止期間が長ければより黒みはつよく、短いときには淡くなる。調査区でも黒褐色の砂質シルト層が認められることから、砕屑物の供給量が一時的に減少した時期があったと思われる。しかし、その色調が薄いことから、休止期は長くは続かず、休止期の後も現在の地表面(標高約-1.0m)まで層厚およそ1.5mほどのシルト層が上方に累積している事実から考えても、当地の近傍には砕屑物をもたらすだけの河川流路が存在したと考えねばならない。(鬼頭)

(2) 日置をとりまく河道

最後に日置本郷 B 遺跡の周辺に存在した可能性のある旧河川について、明治 17年の地籍図にみられた地形と現在の表層地形において対応した部分をもとに検討する。

地籍図の分析から抽出した地形において推定した新旧関係をもとに、中世にさかのぼる可能性のある旧河川は、江戸時代前期以前の天王川の旧河道に関連するもので、又吉低地部に直接つながる低地部であり、藤浪微高地群の北東より続く善田川西低地部とそれに続く愛宕西低地部、中地低地部、須依落合低地部、中地低地部より続く日置西低地部がある。同様に佐屋川に直接つながる佐屋微高地群とその西にある佐屋西低地部、近世以後の堤である佐屋川東微高地群を挟んで北西側で佐屋川から続く向島柚木低地部がある。向島柚木低地部は南東側において、天王川の堤防を挟んで向島村から柚木村へ続いている。

これらの地籍図に見られる低地部と現在の表層 地形は先に述べたように概ね対応しているが、近 代以後の道路建設や工場建設などにより大規模な 地形改変が加わっているため、明治17年の地籍 図の土地利用と微妙な差異が見られる。また地籍 図や遺跡の調査成果においてもみられたように、 中世後半期と江戸時代後期の遺構・出土遺物の分 布に大きな変化があることが確認できており、近 世以後の様々な土地利用が行われた結果をみてい

るものである。

日置本郷B遺跡の調査地点は⑰日置稲葉微高 地群の北端に位置しており、遺跡付近は⑦川原七 坪微高地群や⑩愛宕微高地群との接点にある。ま た3つの微高地群の接点であることから、日置西 低地部の北東端部と日置東低地部の北西端部、善 田川中低地部の南西端部の接点にもなりうる地点 である。発掘調査でみつかった 09A 区の南と北 それぞれの自然流路跡は日置東低地部の北西端部 に続くものであり、表層地形にみられる谷地形と 対応している。この遺跡で見つかった自然流路跡 の流下方向を推定するならば、流路は地籍図に見 られる微高地群の接点である部分と対応する現在 の表層地形に見られる谷地形が有力な候補となろ う。同様な微高地群の接点としては、須依落合低 地部の北西端部で⑤佐屋微高地群と⑥柚木須依微 高地群が接している部分において、現在の表層地 形に見られる津島市常盤町から愛西市柚木町にの びる南北の谷地形がみられ、中地低地部の東側で ⑥中地東微高地群と⑦川原七坪微高地群が接して いる部分においても、愛西市内佐屋村から愛西市 北一色村につづく谷地形がみられる。よって、こ れらの地籍図にみられる低地部と現在の表層地形 にみられる谷地形の時期は、文献資料からは江戸 時代前期以前にさかのぼる地形と考えられ、さら に発掘調査成果からは古代にさかのぼる可能性が あり、中世においても旧河川として存在した可能 性が高く、江戸時代前期にかけて埋没したものと 推定できる。 (蔭山)

(3) 推定される日置の古地理環境

最後に、日置本郷 B 遺跡周辺の古地理環境を考えてみたい。まず、前節までの分析から、古代から中世にかけての日置本郷 B 遺跡の周辺には河川が流れていた可能性が高いことが指摘された。また発掘調査成果から、遺跡の遺構と出土遺物の分布から、古代から中世後半期にかけて存在した自然流路などの地形の起伏に強い影響を受けた営みが想定でき、調査区からはシジミやマガキなどの汽水生の貝類が検出されている事実から、汽水域の近くに存在したことが指摘されている。

遺跡の周辺でも古墳時代前期初頭からの遺跡が

確認されており、古代以後の遺跡は多くみつかっ ている。このような遺跡の歴史的展開については、 『佐屋町史』において服部元之氏が指摘されたも のを追認するものである。この服部氏の叙述の中 で、日置付近の遺跡の立地を考える上で重要な ものとして山茶碗(ほとんどが12世紀後半から 13世紀のもの)をともなって出土する貝類が挙 げられる。服部氏の確認されたものとして、須依 ―稲葉遺跡(愛西市須依町~稲葉町)においてハ マグリ・アサリ・ヤマトシジミ、元屋敷 A 遺跡 (愛西市須依町、遺跡番号23)においてハマグリ、 元屋敷 B 遺跡(愛西市須依町、遺跡番号 23)に おいてハマグリ・アサリ、米野A遺跡(愛西市 稲葉町、遺跡番号11)においてハマグリ・アサリ、 大之内遺跡(愛西市西保町、本書図3遺跡番号 48) においてマテガイ・ハマグリ・アサリ、城 之内遺跡(愛西市西保町、本書図3遺跡番号46) においてハマグリがあり、山茶碗などの考古遺物 を伴わないものとして、大正遺跡(愛西市東保町) においてハマグリ・アサリ・アカガイ、梶代遺 跡(愛西市東保町)においてハマグリ・カガミガ イ・アサリ、二町田遺跡(愛西市西條町)におい てマガキ・イタボガキ・ハマグリ・アサリが確認 されている(註5)。以上の遺跡分布から愛西市 の日置町から稲葉町や須依町を経て、西條町や東 保町、西保町にいたる北東から南西にかけての標 高 -1,0m ~ -2.0m の範囲が、中世の汽水域の近 くに面する地域と考えられないであろうか。つま り、これらの地域が中世において海岸を臨む陸上 河川との境界付近にあったと考えられる。加えて、 等高線の間隔の広さは地形の傾斜が緩やかである ことを示す。表層地形解析から調査地点の南東に 標高 -2.2m ~ -1.4m までの等高線間隔の広い部 分が認められ、緩やかな地形が開けた海岸の入り 江状を呈する地形を形成していたと推定される。

そして中世において愛西市日置町付近に存在した日置荘では、年貢が絹によって納められていたように、尾張南西部の荘園では絹が盛んに生産されていたことは著名なことである(註6)。その原風景ともいえる記述が先の述べた『海道記』の中にあり、河川などから上がった陸地では、桑が

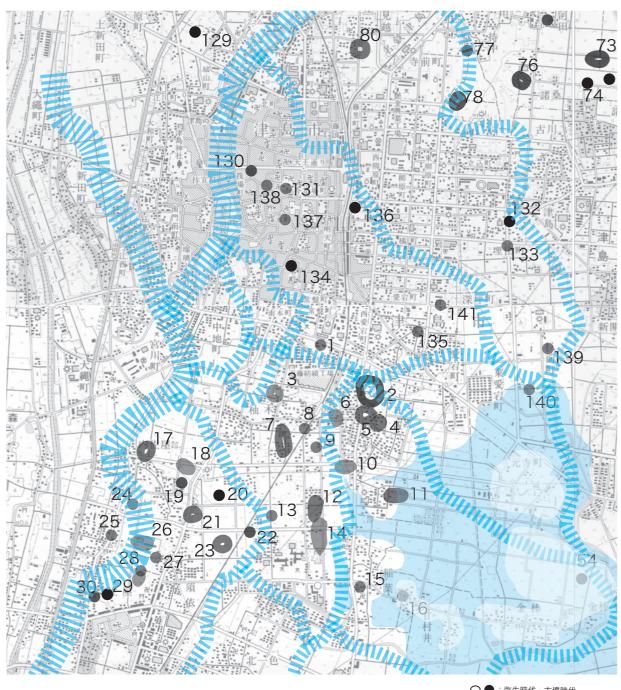


図 57 日置の古地理環境想定図

(青色点線は推定河川、青色編み掛けは推定入り江、遺跡番号は本書第1章表1に対応する)

弥生時代・古墳時代 から営まれる遺跡 奈良時代・平安時代 から営まれる遺跡 鎌倉時代・室町時代 から営まれる遺跡

生える畑地が存在し、宅などの建物がたち、駒が 放し飼いにされている景観が広がっていたのであ る。 (鬼頭・蔭山)

「註〕

- (1) 服部元之 1996「第二章 考古」『佐屋町史』 通史編、佐屋町史編纂委員会
- (2) 湯浅健二・江崎武・赤塚次郎 1990「蜂須賀 遺跡と「海部の古道」」『考古学フォーラム』1、 愛知考古学談話会
- (3) 赤塚次郎・石黒立人・宮腰健司・城ヶ谷和弘・ 池本正明 1990「寺野遺跡の出土遺物について 海部郡周辺の遺跡を探る」『考古学フォーラム』2、 愛知考古学談話会
- (4) 水野時二 1971『条里制の歴史地理学的研究』 大明堂
- (5) 海部・津島地域において、12世紀から13世紀の山茶碗が出土する遺跡として、愛西市二子町所在の北柳原遺跡において、山茶碗などとともにハマグリ・シジミ・アサリ・アカガイなどが出土し、津島市宇治町所在旭羊毛構内遺跡(図3遺跡番号122)において、12世紀後半~13世紀の山茶碗などの陶器とともにシジミ・ハマグリ・カキなどが、津島市中一色町所在中一色町遺跡(本書図3遺跡番号127)において鎌倉時代から室町時代の土器と陶器に混じってハマグリ・カキなどが出土している。

服部元之2000「第2章考古」『八開村史』通史編、八開村役場所収の「北柳原遺跡」

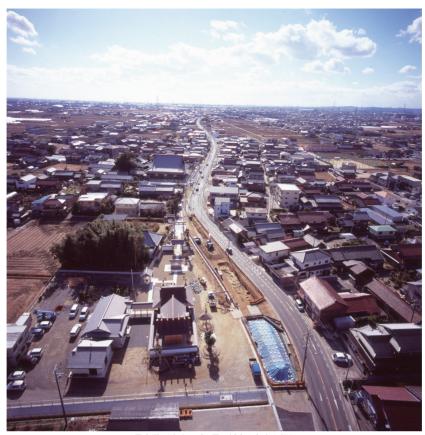
伊藤晃雄編 1970 『津島市史』資料編(一)、津 島市教育委員会所収の「宇治町旭羊毛構内遺跡」・ 「中一色町遺跡」

(6) 大山喬平 1978「絹と綿の荘園」『日本中世農 村史の研究』岩波書店

その他の参考・引用文献

佐織町史編さん委員会 1987 『佐織町史』 資料編二、 佐織町役場

佐織町史編さん委員会 1989『佐織町史』通史編、 佐織町役場

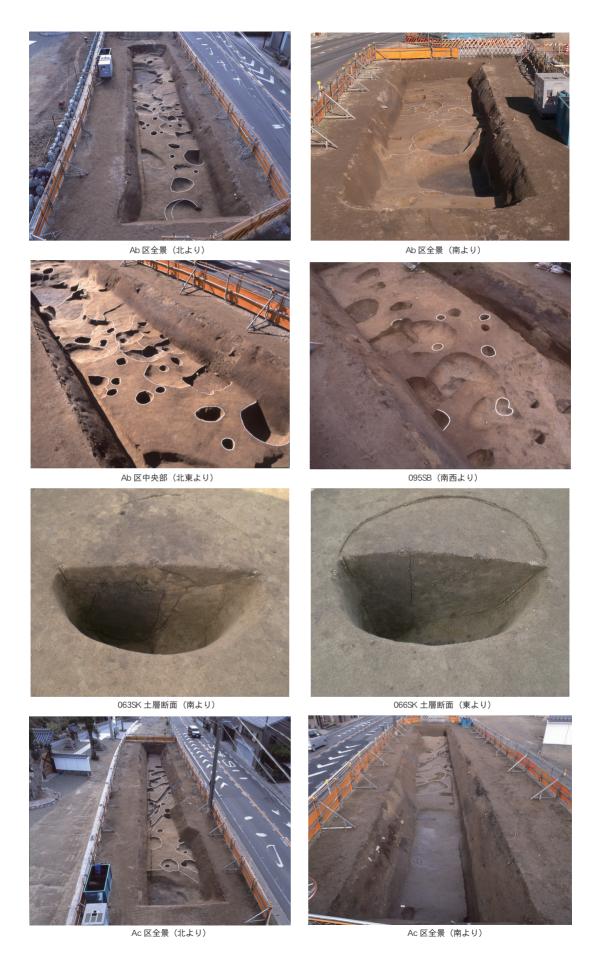


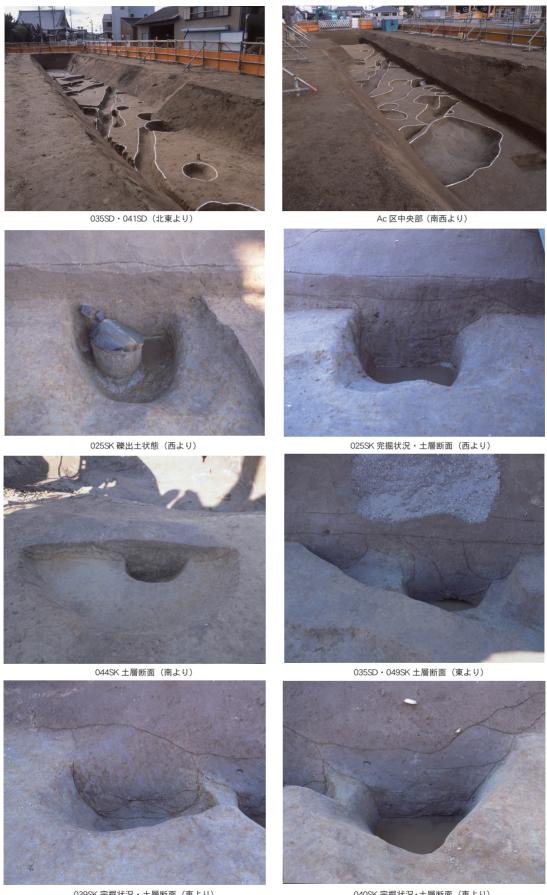
日置本郷B遺跡及び日置八幡宮から南を望む



南から日置本郷B遺跡を望む(中央の大きな屋根が明通寺、その背後が日置八幡宮)







039SK 完掘状況・土層断面(東より)

040SK 完掘状況・土層断面 (東より)

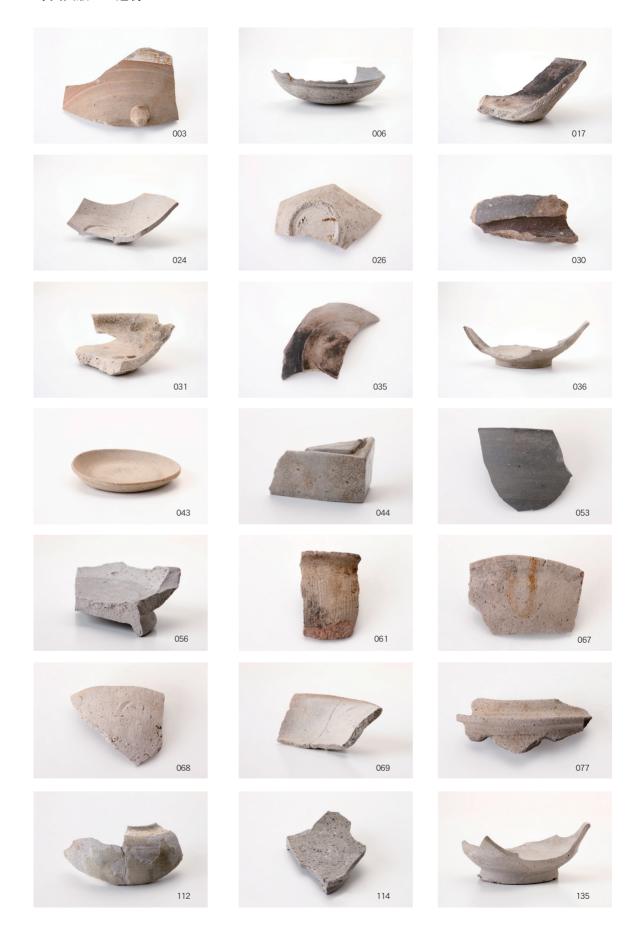


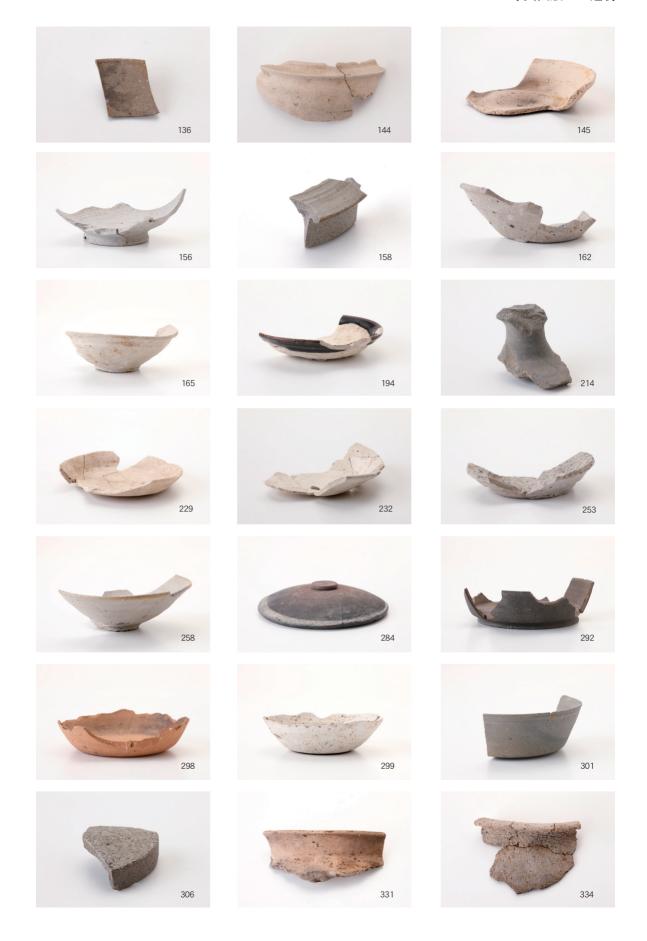




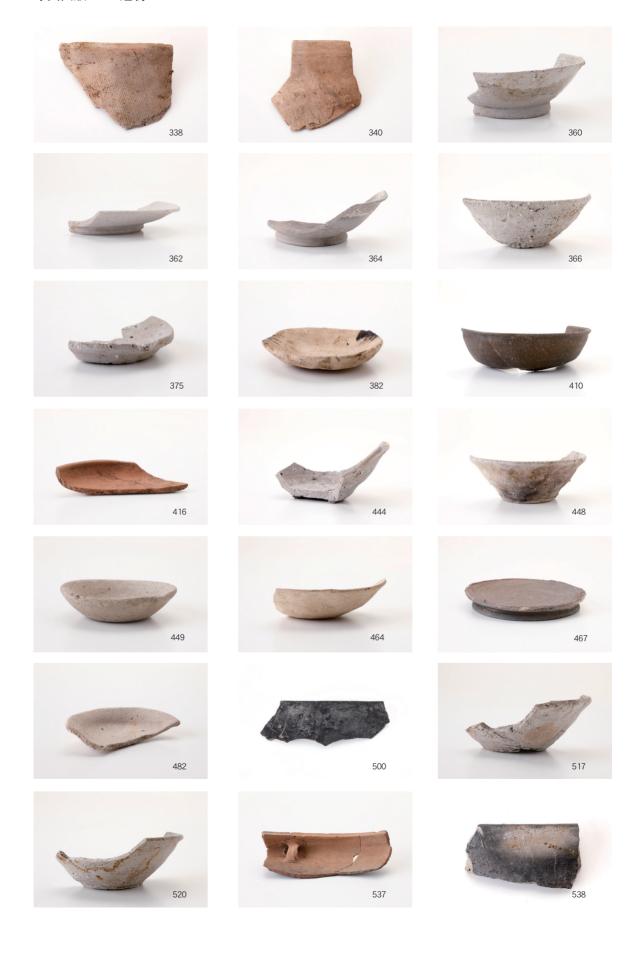
Cf 区東壁土層断面(西より)

写真図版8 遺物





写真図版 10 遺物









青磁



白磁



加工円盤



S03





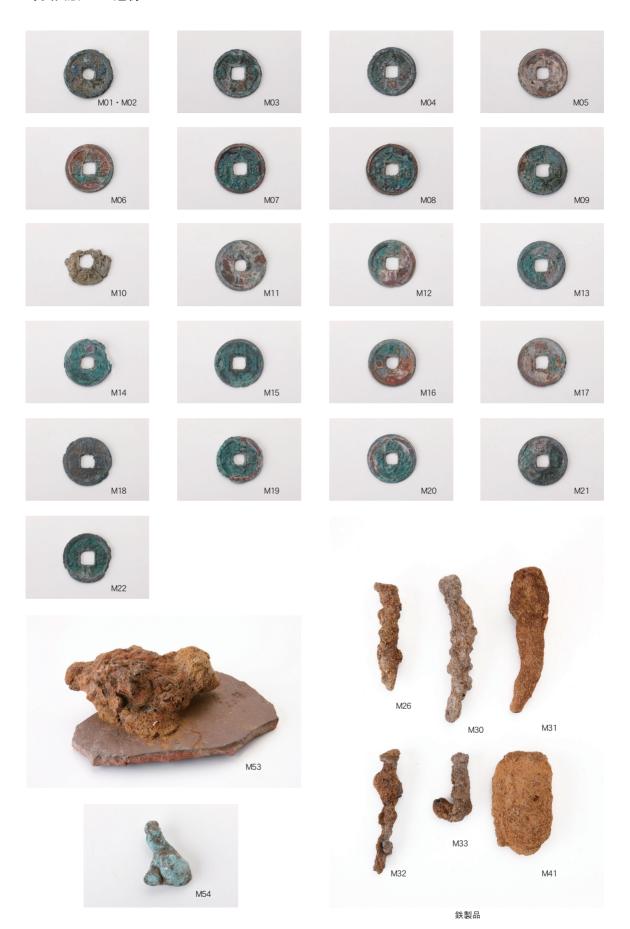
土錘



製塩土器



写真図版 14 遺物



抄録

ふりがな	へきほんごうビーいせき								
書 名	日置本郷B遺跡								
副書名									
巻次									
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書								
シリーズ番号	第177集								
編著者名	石田泰弘・蔭山誠一・鬼頭剛・黒沼保子・中村健太郎・宮腰健司								
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター								
所 在 地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL 0567-67-4163								
発行年月日	西曆2012年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな		コード					調査	
	· . · ·	在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積 m²	調査原因
へきほんごう 日置本郷 ビーいせき B遺跡	あいちけんあいさいし 愛知県愛西市 へきまちほんごう 日置町本郷		232327	37005	35度 9分 50秒	136度 43分 4秒	2010.12 ~ 2011.2	1,100	県道富島津 島線自転車 歩行者道設 置
所収遺跡名	種 別 主な時代 主 な 遺 構		主な遺物			特記事項			
日置八幡宮遺跡	集落跡	奈良時代・ 平安時代 鎌倉時代・ 室町時代 江戸時代 溝3条・土坑1基			須恵器・灰釉陶器・土師器 ・製塩土器 山茶碗・小皿・青磁・白磁・ 土師器・土錘・古瀬戸陶器・瓦・ 砥石・井戸組み板 陶磁器・土師器・砥石			古代から中世にかけ ての集落跡	
文書番号	発掘届出(21埋セ第77号、平成21年10月22日付) 通知(21教生第1689号、平成21年11月12日付) 終了届・発見届・保管証(21埋セ第118号、平成22年3月1日付) 監査結果通知(21教生第2719号、平成22年3月29日付)								
要約	奈良時代から平安時代前期にかけての遺構と遺物、平安時代末から室町時代にかけての遺構と遺物、江戸時代後期の遺構と遺物が確認され、奈良時代から平安時代前期には集落跡の居住域が営まれ、平安時代末から室町時代にかけては、集落跡の居住域と墓域が推定された。そして、遺構・出土遺物の分布状況から、奈良時代から室町時代にかけての集落跡が、江戸時代後期の集落跡に比べて、自然地形の起伏による影響をより強く受けて形成されていた状況がみられた。								

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第177集

日置本郷 B 遺跡

2012年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社